

3 極早生酒米品種の玄米品質と気温との関係

ねらいと成果

県北部で栽培されている極早生酒米品種は登熟期間の気温が年間で最も高い時期であることから、年次や地域により乳白米や背白米等の障害粒が多発する。極早生酒米品種の良質安定生産を図るためには、作期や栽培適地の検討が必要であり、そのため玄米品質と気温との関係を調査した。

乳白米の発生は登熟期間中期（出穂後11日～20日）、背白米の発生は登熟初期（出穂期～10日）の日平均気温と正の相関があり、乳白米、背白米とも登熟期間の日平均気温が25℃以下では発生が少なかった。

内容

1996～1998年の3カ年、豊岡市清冷寺（標高1m）と日高町東河内（標高345m）の2カ所で極早生酒米品種6種（兵系酒65号、兵系酒66号、酒939-2、兵庫北錦、五百万石、フクノハナ）を栽培し、登熟期間の気温と玄米品質との関係を調査した。乳白米、背白米の発生率は黙視により調査した。移植期は5月13～14日で供試苗、栽植密度、施肥法は同一条件で行った。

(1) 登熟期間の日平均気温は豊岡市が日高町に比べて1.8～2.6℃高く、供試6品種・系統の出穂期、成熟期は豊岡市がそれぞれ、7～10日、10日～15日早かった。乳白米の発生は全般に豊岡市で多く、

品種別では「兵庫北錦」、「フクノハナ」で多く、「兵系酒66号」は少なかった。

(2) 乳白米については、「兵系酒65号」、「兵庫北錦」、「酒939-2」、「フクノハナ」の4品種・系統において、登熟期間の日平均気温と正の有意な相関があり、登熟期間の日平均気温が高いほど乳白米の発生が多くなる傾向が認められた。特に、登熟中期（出穂後11日～20日）の気温との相関が高かった。

乳白米の発生は登熟期間中期では日平均気温が27℃、全期間では26℃以上になると多く、25℃以下では少なかった。

(3) 背白米と登熟期間の気温との関係は、「兵系酒65号」、「フクノハナ」では登熟初期（出穂期～10日）の日平均気温と正の有意な相関があった。

今後の方針

県北部で栽培する極早生酒米品種の良質安定化を図るためには、登熟期間の日平均気温が25℃以下になるように、栽培地域の選定や作期の移動により出穂期を調節することが必要である。そのためには、「兵庫県メッシュ気候データベース」や「水稻出穂期予測システム」の利用が有効である。また、品種面では、高温登熟条件下でも乳白米等の障害粒の発生の少ない品種の育成、導入が必要である。

池上 勝（中央農技・酒米試験地）

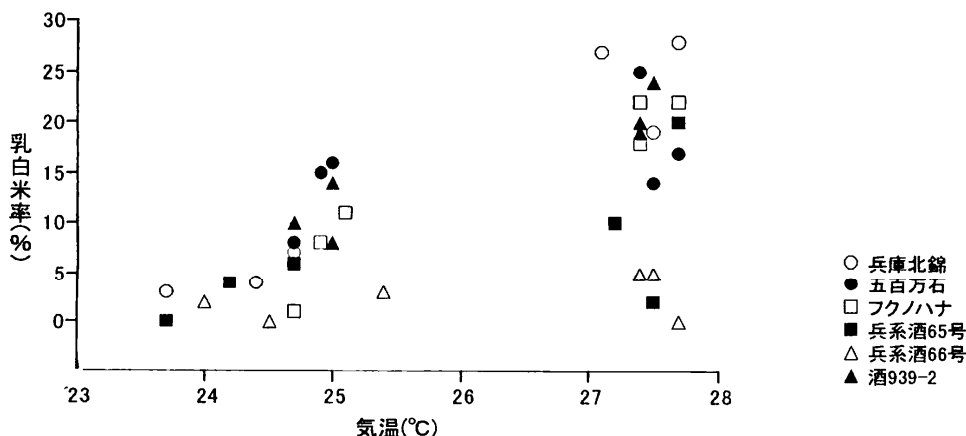


図 出穂後11日目～20日目までの日平均気温と乳白米の関係